

## 鹿児島の植物32

## 照葉の森の異変

植物担当 寺田 仁志

この夏、次々と大きな照葉樹が枯れるのを目のあたりにしていませんか。これはカシノナガキクイムシによるものと思って間違いないでしょう。

カシノナガキクイムシは雌雄とも体長4mm前後のキクイムシ科の昆虫で、雌の背中には自分で養殖して食べるカビ（ナラ菌）を蓄えている部屋があります。この小さな虫が大木を次々と倒して森を変えているのです。



穿孔中のカシノナガキクイムシ

6月頃、枯木から羽化した雄が、ほぼ直径が25cm以上の大きな木々にアタックして穴を開け、フラスという木くずの集まりができます。雄はゴキブリのように集合フェロモンで他の雄を次々と呼び寄せ、1本の木に数十～数百になる穴を開けます。ついでそれらの雄が雌を呼び寄せて交尾し、雌は穴の中に産卵するとともに幼虫のえさとなるナラ菌をばらまきます。

ナラ菌は繁殖して菌糸をのぼすと、樹木の通道組織に害を及ぼすことがあります、このため樹木は水を葉まで吸



スダジイにできたフラス

い上げることができなくなり、雄の一斉攻撃からわずか1～1.5か月で枯れてしまいます。

孵化した幼虫は穴を掘り、さらにナラ菌を奥深く送り込んで材を分解し、増えたナラ菌を食べて成長します。こうして1年後の翌6月頃から幼虫は羽を持った成虫となって枯木を飛び出し、1本の木から数千から数万の虫が飛び出すと言われています。

さて、カシノナガキクイムシが攻撃する木は主にブナ以外のブナ科植物（ドングリをつけるグループ）です。昨年までは、金峰山や屋久島、薩摩川内入来付近では主にマテバシイが、霧島ではアカガシが標的にされてきま

した。ところが今年（2010年）はこれまで発生が目立たなかった鹿児島市内に大量に枯木が発生しています。森の中に入って調べて見ると主にスダジイで、次いでアラカシ、マテバシイ、中にはイチイガシも混じっています。攻撃はブナ科植物に限定されているわけではなく大きな木であればタブノキなどにも攻撃がありますが、タブノキは枯れていません。

カシノナガキクイムシによる枯れについてはブナ科の樹木は根際や中途から芽を出（萌芽）し、次の世代の樹木として伸びるため自然の移り変わり（天然更新）の1つとして考えられ、複雑な生態系を持つ大きな森では心配がないという人もいます。

ところが、鹿児島市内ではシラス台地の上下に住宅地があり、その台地の急峻な法面にわずかに残っていたスダジイの二次林やマテバシイ林が今被害に遭っています。

これらの森はかつての里山で、プロパンガスが普及するまでは貴重な燃料でした。その後伐採されることなく放置され50年以上経てカシノナガキクイムシが利用する大きさにまで多くの木々が成長してしまったのです。里山の木々は15年サイクルぐらいで伐採され、木が小さかったため発生しなかった被害も、緑が豊かになったため起こった皮肉な現象です。

この急峻な斜面に生えるスダジイやマテバシイの大きな木々が枯れると、その下にある道路や住宅には木が落ちてきたり、枯れた木の根っこから雨水が地下に浸透し、豪雨時には崖崩れを起こしたりする懸念もあります。また、せっかく帰ってきた豊かな自然をもつ森の生態系が単純化していくことや深い緑が失われ落ち着いた景観が失われることも問題です。

カシノナガキクイムシの被害は江戸時代から記録され、近年は鹿児島だけでなく全国的に広がり、特に東北では落葉樹のミズナラなどのナラ枯れ被害が深刻です。被害が沈静化し生態系が安定化することを願わざるを得ません。



枯れた民家裏山のマテバシイ